博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　加藤 雄二

学位申請者　　楊 柳岸（ヨウ リュウガン）

論　文　名

水上勉作品における「中国」表象の変容と重層性
―人物・風景・文化をめぐって―

【審査結果】

2026年6月29日、加藤雄二（主査）、橋本雄一(主任指導教員)、友常勉、倉田明子、柴田勝二（本学名誉教授）、からなる審査委員会は、楊柳岸（ヨウ　リュウガン）氏が提出した博士学位請求論文「水上勉作品における「中国」表象の変容と重層性　―人物・風景・文化をめぐって―」の審査および口述による最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するに相応しい研究であるとの結論に達した。

【論文の構成】

序　章　水上勉作品における「中国」との交錯
第Ⅰ部　水上勉「現代中国」関連作品論
第1章　水上勉作品における「老舎」―井上靖・開高健との比較を通して
第2章　水上勉『虎丘雲巖寺』における「中国」
―1970年代の日本人作家の中国訪問を視座として
第Ⅱ部　水上勉「満洲」関連作品論
第3章　水上勉作品における「満洲娼婦」像の生成と変遷
第4章　水上勉作品における「中国人苦力」像の変遷
第Ⅲ部　水上勉「古代中国」関連作品論
第5章　「清富記」論 ―「金銀」との比較を通して
第6章　『虚竹の笛――尺八私考』論
―「虚竹」像の変遷と「尺八」の象徴性
終章　　水上勉作品における「中国」表象 ―総括と展望

【論文の概要】

本論文は、アジア・太平洋戦争後の日本の文学作家、水上勉（1919-2004年）のおもに小説を対象とし、歴史的に中国大陸との関わりが主題とされた作品の関連描写と表現かつ作品群ごとの変遷を解明した。

扱った作品としては、作家による直接体験と作品の物語世界が融合した時間（時代）に基づいて、三つに分けられた。まずは、水上本人の旧「満洲国」における直接体験から成る作品群である。次に、日本敗戦ののちに推理小説・大衆小説作家として知られていく初期からすでに「日中」体験エピソードを作品にもしたこの作家が、日中国交回復前に中国人作家訪日団と交流する事実から、あらためて素材を得ていく作品群。更に、前近代までの中国仏教の思考・文化が日本に渡来した日中文化交流史を背景とする作品群である。

この対象と視点をもって、本論文は水上勉による長い創作時間にあった中国大陸と日本との関係に着目し、日本ではこの文脈からは知られていない作品の特性を分析した。近代戦争をアジアに発動した帝国日本とその後の日本についての文学テクストが「中国」を対象・舞台とし、日本との関係史と文化史また近代日本植民地にあったジェンダー問題・他者認識問題をめぐって、どう言語化したかという問いに、本研究は裏打ちされている。

特に 1970 年代の日中国交・交流回復を機に、作家本人が中国を訪問し始めたのを契機に、過去の植民地体験・中国作家との交流・仏教的思索を、水上が語り直す作品が生まれていく。本論文はそれらの作品が持った人的往来と文化的交流を重要な背景とみなし、「人物・風景・文化」という三つの観点から、テクストがもつ「中国」との関係を広がりと変化の過程として跡づけた。

序章では、まず水上勉の個人体験と中国との関わりを整理する。「中国」関連作品がいかなる動機のもとに成立したのかを、作家の幼少期の仏教修練体験、植民地「満洲」体験、国交回復前の中国作家訪問団との交流、国交回復後に水上が繰り返した中国訪問という要因をもって説明する。これを踏まえた分析の枠組みとして、「現代中国」関連作品、「満洲」関連作品、「古代中国」関連作品という、作家体験と物語内部の時間が融合された三区分を提起した。

第 1 章では、中国近現代作家、老舎（1899-1966 年）との面会（1965 年の中国作家たちによる日本訪問団のさい）を契機に水上が執筆した複数の作品を対象とし、そこにある老舎という人物像と二人の心的交流の描写を検討した。その際、井上靖と開高健による老舎を題材とした作品との比較も行なっている。

老舎をめぐる水上の関連作品は、老舎の死の翌年という早くから創作が始まり、のちの仏教関連作品の起点とも言えるそれらが、本格的な中国訪問より前であることも本論文は指摘する。そのうえで水上が老舎を文化大革命という歴史的事件の「犠牲者」とのみ捉えるのではなく、自分と同時代を生きた作家としてかつ「社会的弱者」を共に見つめる作家として、捉え続けた点に特徴があるとした。

ただ一度の老舎との面会時に禅用語「本来無一物」について語り合ったことが、のちの水上が独自にリフレインしていく「禅宗もの」～「古代中国」作品創作の伏線となっていることにも着目。水上の「老舎語り」がもつ、のちの「中国」関連作品との強い関係性も明らかにした。

第 2 章では、1970 年代後半からの日中往来の再開という歴史的背景のもと、水上の創作紀行文「虎丘雲巖寺」を分析する。戦争・植民地期を挟む長い近代期の作家交流・衝突に比べ、国交正常化以降 1970 年代からの日中文学交流は従来検討されることが少ない。本章では 1975 年からの水上の中国訪問に注目、かつて 1938 年日本植民地統治期に「満洲」として一時過ごした中国東北部にとどまらず、訪問団としてまた個人的探訪として、中国各地へ広がって繰り返される。本章はこれらの訪問を基点に据えて、華中・華南を主たる舞台とするテクストを分析した。そのさい、同時期に訪中した井上靖・司馬遼太郎の作品との比較も取り入れ、そこから見えてくる水上の「中国」表象について定義する。それは古代王朝の歴史・伝聞・風景に目を遡らせるのでなく、「民衆」の日常生活を見つめるという

特徴である。背景にはやはり、初期作品以来からのいわゆる「庶民」への関心と、少年期から続く仏教〜禅宗との関わりがある。老舎との語り合いからスタートした禅僧慧能（中国南宋）への関心を中国ゆかりの地を巡って深め、紀行作品「虎丘雲巖寺」を結実させた。作家晩年の最大の関心であると本研究が位置づける「仏心」「禅」への思索が、すでにここにあると分析した。

第 3 章は、「大連逢阪町」（単行本は 1979 年）、「停車場有情」（同 1980 年）、「瀋陽の月」（同 1986 年）という三つの連作として完成した作品群を扱う。それらを横断する問題性、すなわち「満洲娼婦」像の表象・記録性・変遷を検討した。これらの作品も、作家本人による「満洲」（近代日本統治期の中国東北部）への直接体験が起点となっている。それらの作品では、「娼婦」とされた女性たちが植民地都市の「遊廓」という具体的な歴史空間の中に記録・配置され、戦時下の動員や強制された移動といった政治背景も見せながら、「戦後」〜国交回復後に創作されていく水上の作品に描かれていくことを、本章はまず指摘する。

連作描写の変遷も焦点化し、従順や沈黙を基調とした姿から日本人男性に対して警戒を示す姿に変わっていく日本人「満洲娼婦」像に対して、朝鮮人「娼婦」を物語へ導入する作品では、近代男性社会から性差を強いられる近代女性の実態にさえ民族間の非対称性が内包された。この歴史事実に対する大切な確認の糸口であるのが、水上によるこれら連作であることを、本章は検証した。

しかし水上の作品は、彼女たちが「なぜそこにそう存在させられているのか」という政治と歴史事実を、しばしば「出稼ぎ」といった言語と感覚で語る。かつ女性たちの境遇への斡旋・貧困・ジェンダーとそこへ複合的に重なる植民地支配と性的支配の構造は、主題とはならない。それどころか十分に言語化されない。この問題も本章は冷静に指摘した。かつ中国人「娼婦」がほとんど描かれていない事実については、作家・作品がもつ問題領野として今後検討すべきであるとした。

第 4 章は、やはり上の三連作に結実した作品群を対象に、視点をそこに描かれた中国人「苦力」（クーリー。港湾等で働く社会下層の肉体労働者）の描写に照準する。作家自身の体験でもあった旧「満洲」の労働現場における日本人監督。そのもとの中国人「苦力」。植民地宗主国である日本（人）と植民地現地人である中国（人）、という非対称性を、作家がまずはテクスト内に空間化した意義を確認した。一方で、作家自身の体験をめぐって、またその後創作された物語内の語り手自身をめぐって、戦争と植民地の政治空間で加害の側に属するという内省的な透視が、水上作品内には薄いことも指摘した。

加えて、この「苦力」表象が、中国人「小孩」（シアオハイ。現地中国人の子供たち）への表象と連動していることを、本章が剔出したことには大きな意義がある。「小孩」の容姿についてのステレオタイプな描写が反復されることも指摘、「苦力」および「小孩」をめぐる描述がつまりは集団的な「群」と感覚されている問題に迫った。植民地統治の暴力を可視化する装置として現地の人間への描写・記録性は機能しつつも、作品全体としてはやはり宗主国側の語りの枠組みにある。この水上作品における二重性を解明した。

第 5 章では、1993 年発表の短篇小説「清富記」を中心に、1975 年発表の「金銀」との比較をもって、中国発の禅宗的仏教性を人間・風景を舞台に展開する作家の創作と理解の変化を検討した。「清富記」は水上が個別に取り組んできた「中国」と禅宗という二つの題材が、一つのテクスト内部で交差する里程標であると考察。創作された主人公・孟阿は南宋期を舞台とする在家信仰者であり、作家がそれまでに理想的禅僧像としてきた龐居士とは対照的であると指摘。「金銀」が個人の「内面」に重きを置くのに対し、「清富記」では南宋の政治的宗教的背景も加わり、宗教という制度や実践の問題にまで思考が広がっているとする。「清貧」を理想とする価値観から、「清富」という歓待の思想としての新たな理念へと移行していることを指摘した。在家の実践によって禅を体現する主人公を用いて、制度化した「宗教」への距離感と、生活の場で実践される思考の可能性とが提示されている。水上晩年の仏教をめぐる思考の到達点を示す作品の一つだと結論づけた。

第 6 章では、水上勉の最晩年における「中国」関連作品の集大成として、「虚竹の笛　―尺八私考」（2001 年）を検討した。早くは 1969 年に始まる「虚竹の笛」シリーズが元となり、作家がこだわった数百年にわたる日本と中国の交流史を背景に、史実と伝説が往還する長篇小説である。本章は、これを単独作品としてではなく連作全体の系譜と創作意識の変容として読みつなげることで、水上による「中国」関連作品の終着点だと、位置づけた。

虚竹が単一の個人ではなく、日中交流・仏教精神・漂泊者・望郷意識が体現された象徴体であると指摘する。中国近代作家で近代日本とのゆかりもある蘇曼殊への関心を背景に虚竹に付与された「混血性」も重視。そこに、文化の越境と融合という作家の日本と中国を水平に思考する意義を強調した。さらに笛＝尺八というモチーフも、単なる楽器を超えて、日本においては渡来文化を支えた歴史と心の工具として作品内にある、と認識した。

終章は以上の研究の総括である。水上勉の「中国」関連作品は長い創作期間を通して断続的に書き継がれ、「中国」が外部の異文化とだけ描かれるのではなく、作家自身の直接体験の、また関心と問題意識を生み出す場所・思考であったとする。さらに、この一人の作家・作品においても、この場所と思考が単一ではなく、変容しながら続けられたとした。

以上のように、「中国」表象が人物・風景・文化の三層の重なりによって構成され、それらが作品ごと・時期ごとに変化しながら再構成されていく作品たち。人物の層では植民地期中国東北に生み出された事実と問題としての「満洲娼婦」また「苦力」「小孩」が扱われ、風景の層では中国作家との語らいをきっかけとして戦時体験と記憶から甦りさらに国交回復後の訪中で眺めた空間が、物語る舞台となった。それらはさらに文化の表現層となって、禅的思考にちなんだ思索が中国を舞台に形成される。この水上勉の作品史にある顕著な一つの流れを、終章ではまとめた。

課題としては、「戦後」日本文学における「中国」表象を、さらに広範囲な他の作家作品と比較すること、また水上の「古代中国」作品における「禅宗」の把握の様態にかんするさらに精密な分析、を挙げている。

【審査の概要】

公開審査は、2026 年 6 月 29 日午後 17 時半から２時間半をかけて、東京外国語大学本部管理棟の中会議室にて行なわれた。審査員の構成は、加藤雄二（主査）、橋本雄一（主指導教員）、友常勉、倉田明子、柴田勝二（本学名誉教授）である。審査の冒頭では、著者楊柳岸から本論文の趣旨と概要について、資料投影のうえで説明がなされた。続いて各審査員からの質問やコメントに著者が答える形で質疑応答がなされた。

本研究について、大きく評価された点は以下である：

第一に、水上勉の作品への独自の視点、すなわち作家も経験した近代日本植民地「満洲」―「戦後」日本と中華人民共和国と（また双方の作家どうし）の接点―大陸渡来仏教文化、という三つの現実と物語内の時間をめぐって、作品自体と連作創作行為にある顕著な特性を整理したことに大きな価値を見る。

本研究の対象すべてが、従来注目されることの少なかった「中国」関連作品についての各論である。本論文の進行はそれらを作品成立の時系列で追い、それぞれ細密に検討した。これが本論文にまず認められる意義である。この「戦後」日本で著名な推理小説・大衆小説作家が持つ、もう一つの顕著な実践と大きな創作過程があったことを、本論文は検証した。

第二に、作家の「中国」関連創作がいかに断続して変容したか・精錬されていったか、というダイナミックな側面に踏み込んだことは、注目に値する。水上の作品が見つめる「中国」という多様な意味をも示すこととなった。そうした多様性と変遷をそのまま各論的に提示したままであるきらいはあるものの、それはとりも直さず、「中国」が外部の異地・異文化とだけ描かれるのではなく、作家自身の経験や記憶また関心を起動させる場所・契機そのものだったという事実に他ならない。ここへの広い確認が本研究でなされた。

第三に、ジェンダーに基づく性の商品化あるいは性暴力またそれらを包む植民地主義についての今日の議論を踏まえ、「満洲娼婦」関連作品について語りの問題性を冷静に提示した。

第四に、幼少期の禅寺修行を経てのちのちまで禅的言語・思考に関心を保ち、それを媒介として中国文化への視野を広げた水上勉。この日中間の橋渡しを図るような彼の著作と作家の役割を、本研究は旺盛に紹介・分析している。

第五に、例えば作品「虚竹の笛」には、明王朝の中国に渡る日本人信仰者のなかに倭寇と設定された人物がいる。一つの国家から越境して海洋でつながる文化的「混血」性も持った倭寇は、中国明清史における海域史という視点においても今日注目されている。水上自身の「中国」とのかかわり方にある「混血」性なる概念を、本論文は重要な概念として検討した。

他方、当論文における視点の課題も提出された。

まず、扱った作品についての紹介という傾向も強く、例えば中国人「苦力」と「小孩」については作品内に描かれた外見的容姿を主に問題とし、それら人物のテクスト内の由来性＝登場の仕方や作品全体に持つ意味、あるいは水上による語りの構造のなかでそれらの人物が持たされた役割、が見えない。このことは「瀋陽の月」等の考察にも言え、男性性の語りによる「情愛」「ノスタルジー」の問題を批判的に抽出するに至っていない。

第二に、本研究が扱った作品群を、水上勉の日本社会における代表作「雁の寺」、「三番町夕霧楼」、「金閣炎上」等と繋げると、より有意義だった。さらにこの高次の横断があれば、作家の特性として日本で言われる「情愛」「ノスタルジー」「哀感」といった問題系を、「中国」関連作品群についてもこの作家が持つ本質的な語りのアポリアとして検証でき、より広範な創作のなかに本研究が扱った作品群を定義できたはずである。

第三に、水上勉における「禅宗」の捉え方を検討する必要がある。「仏教」内部における他宗派との区別の曖昧さ、しかしまたその裏返しとして見られる文学創作としての総合力、という二つにさらに注意を及ぼす必要がある。

第四に、作品がもつ日本語語りの空間に本研究者自身がスタティックに居るままに語りを受け取っていることが多々ある。作家や語り手の言葉遣いの外に出て検討を加える必要が、今後はある。例えば、中国の文化大革命期の宗教寺院の破壊を、当時の「西側」による表面的政治ディスクールのまま「唯物主義」が原因だとする作家の記述への、批判的検討である。老舎と面会し着想を得た創作起点という出来事をめぐっても、水上の語りに本研究者が包摂されてしまっているのも同様である。老舎は日本敗戦前は中国大陸ネイティヴ作家として抗日戦争の文化ラインに重要な役割を占めた。この戦争期の事実と水上による「交流」語りとを突き合わせ、「戦後」日本作家の態度に切り込む作業が今後は必要である。

これらは、本論文の著者にとって重要な今後の研究課題でもあり、審査会では著者はすべてに真摯に回答・説明した。今後継続していく研究のなかの課題と方向性を認識していることも述べられた。

審査委員会は、本論文が東京外国語大学の博士学位論文に求められる学術的水準を満たしているとした。以上の論文審査結果かつ最終口頭試験の結果を踏まえ、審査委員会は全員が一致して、本論文に博士（学術）の学位を授与するに相応しいと結論した。